とどまり ゆらめく keep ing : mov ing
藤永 覚耶 展 | Fujinaga Kakuya Exhibition | 2012.7.31 (tue.)—8.12 (sun.) | Gallery PARC

藤永覚耶(ふじなが・かくや / 滋賀・1983~)は、2006年に京都嵯峨芸術大学版画分野を卒業の後、2008年に愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻を修了以降、これまでおもに愛知を中心に定期的な発表を続けています。

藤永作品の特徴は、まずモチーフ(近年では森や植物)を写真撮影し、その図像をもとに、布地にアルコール染料インクを用いて点描し、最後に溶剤でその図像を溶かすというプロセスにあります。それは、一見すると「写真をボカす=写真の持つリアリティを鈍くしていく」行為と呼べるものであり、作品の画面にはどこか不明瞭で抽象的なイメージが出現しています。しかし、藤永は「写真のピントが鮮明に合った箇所よりも、ボケやブレにリアリティを感じる。それは再現的なリアリティではなく、個人の先入観や価値観をぬぐい去った等価な世界に立ち戻るような真実味を持った感覚である」として、そのボケたイメージにリアルではなく「真実味」を見いだすと言います。

私たちの目に見える世界は、常に時間が流れ、その時々々の光量や目の焦点によって、色・形といった知覚・認識すら不確かな「うつろい」の中にあるといえます。その一瞬を切り取り、すべてに焦点があった写真は、本来は知覚し得なかった世界のイメージであるといえます。そして、私たちは先入観や固定概念をもって、そのイメージから擬似的なリアリティを変換・再現・知覚しているといえるのではないのでしょうか。等価の点(情報)の集合である写真から、目と手によって点(図)に置き換えられた図像。それらは溶かされ・ボカされることで、写真が含み持つリアリティやドキュメント性、絵画としての作家の意図をもろい交ぜとなって、等価なものに抑制されるかのようです。それは先入観や固定概念を捨て去って見る世界の「ありのままの姿」であるとともに、鑑賞者の想像が入り込む余地の広さは、私たちに再び「見ること」の不思議さに気付かせてくれるのではないのでしょうか。

本展は藤永にとって京都での初の個展として、平面作品を中心に構成し、その魅力を紹介いたします。また会期中の8月5日(日)17:00から、本展にテキストをお寄せいただいた平田剛志氏(美術批評、京都国立近代美術館研究補佐員)を聞き手に迎えたアーティストトークを開催し、自作解説とともに、今後の作品展開についてのお話をうかがいます。

藤永 覚耶 FUJINAGA Kakuya

1983年 滋賀県生まれ

2006年 京都嵯峨芸術大学 芸術学部造形学科版画分野 卒業

2008年 愛知県立芸術大学 大学院美術研究科油画専攻 修了

※展示作品のキャプションなどは会場設置の作品リストにてご確認ください。

【作家略歴】

【おもな個展】

- 2012 藤永覚耶展 -foliage- (Masayoshi Suzuki Gallery _ 愛知)
- 2011 into the water (GALLERY GOHON _ 愛知)
- 2010 THREE INDIVIDUALS 光 森 夢 (名古屋市民ギャラリー矢田)
- 2008 Alice Syndrome (愛知県立芸術大学サテライトギャラリー)

【おもなグループ展】

- 2010 アーツ・チャレンジ2010 (愛知芸術文化センター)
 - ・ INDIRECT'10 (GALLERY APA _ 愛知)
 - ・ STAY - 常懐荘にて - (旧竹内邸・常懐荘 _ 愛知)
- 2009 版画／視座／作家たち (ギャルリ・プチボワ _ 大阪)
 - ・ INDIRECT'09S (GALLERY APA _ 愛知)
 - ・ 落石計画第2期 scattered seeds 残響 (旧落石無線通信所 _ 北海道)
- 2008 INDIRECT'08M - 箱の中の箱 - (GALLERY APA _ 愛知)
 - ・ Thinking Print vol.2 -もうひとつの写真表現- (京都芸術センター)
- 2007 individual sight (アートコンプレックス・センター _ 東京)
 - ・ 第32回全国大学版画展 (町田市立国際版画美術館 _ 東京)
- 2006 THE NEW FACES (石田大成社ホール _ 京都)
 - ・ 第31回全国大学版画展 -買い上げ賞- (町田市立国際版画美術館 _ 東京)
 - ・ CROSS BORDERS (シルパコーン大学 PSG Gallery _ タイ)
- 2005 FRAME+松浦寿夫展 (海岸通りギャラリーCASO _ 大阪)

【パブリックコレクション】

町田市立国際版画美術館、京都嵯峨芸術大学

【statement】

写真のピントが鮮明に合った箇所よりも、ボケやブレにリアリティを感じる。それは再現的なリアリティではなく、個人の先入観や価値観をぬぐい去った等価な世界に立ち戻るような真実味を持った感覚である。そこには時間や光の焦点など、本来形を一定に保っていない世界の状態の一端が現れているように思う。そして、そこに個を離れた大きな世界の断片を感じ取ることができる。

しかし、それと同時に、様々な基準の中で日常を営む自分がいて、そこに到達できないことを思い知らされる。そのような、日常を営む個の世界と、個を離れた非日常で等価な世界との狭間で揺れ動くものを、平面イメージとして空間の中でいかに表現できるかということを考え、制作を続けている。

僕の制作は、写真から得たイメージを、自分の手を通して綿布の上でインクの点に置き換えてゆく。そして、一度固定されたそれらの点は、溶かされることで、もう一度動き、混ざり合い、動きをとめる。そのように作られたイメージを、しばしの間、作品というかたちで固定する。

今回の展示では、壁面展示の平面作品に加え、ギャラリーパルクの南から入る自然光を取り入れた矩形の床設置の作品を展示する。時間や天候によって変わる自然光の状態によって作品の見え方は変化し、その色彩は、絶対的なものではなく、空間と呼応するような相対的なものとなる。

展示を通して、ただそこにあるイメージを、空っぽの状態で見えて頂ければ幸いです。